

2021年(令和3年)  
1月号(No. 908)

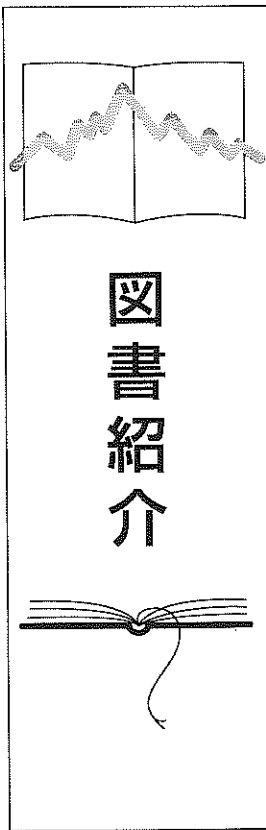
公益社団法人  
**日本山岳会**  
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に  
含まれています

URL <http://www.jac.or.jp>  
e-mail [jac-room@jac.or.jp](mailto:jac-room@jac.or.jp)

## 図書紹介



### ヒマラヤ縦走―「鉄の時代」のヒマラヤ登山

鹿野勝彦著



2020年6月  
本の泉社製 425頁  
A5判上製 税  
3500円+

縦走と聞いて心躍らない登山者  
はいないだろう。それをヒマラヤ  
で行なうとはいかなるものなのか。

本書は世界に先駆けて、極地法によるヒマラヤでの縦走という登山の形を切り拓いた著者が、自らのヒマラヤ登山の軌跡とそのときどきのヒマラヤ登山を取り巻く状況や著者の考えを克明に記したものである。時代は1960年代末以降の「ヒマラヤ登山の鉄の時代」で、著者が隊長や登攀隊長、隊長として参加したキンヤン・キツシュ(65年)、2度のチョモランマ(70年、73年)、チューレン・ヒマール縦走(71

年)、ナンダ・デヴィ縦走(76年)、カ  
ンチエンジュンガ縦走(84年)とい  
う約20年間の6登山が扱われる。  
公式報告書に載らなかつた箇に  
衣着せぬ批評と詳細な記録はそれ  
自体に価値があるが、本書の核心  
は各登山の総括とそこから弁証法  
的に生まれたヒマラヤ縦走登山論  
である。刮目すべきは、極地法に  
よるヒマラヤ縦走とは、私たちが  
想像しがちな「兵隊の山登り」とは  
異質なことだ。ヒマラヤの縦走で  
は、縦走隊の下山ルートを確保し  
サポーターする態勢が欠かせない。  
ルートは2〜3に分かれ、キャン  
プも10〜11ヶ所に上るなか、BC  
に留まる隊長が隊員の日々の行動  
と荷揚げを管理し指示するという  
極地法のやり方は通用しない。そ  
の代わり、隊員すべてが目的や情  
報を共有した上で、それに基つい  
て一人一人が現場で自ら判断し意  
思決定して行動するだけの能力、  
自覚、責任感を具えていることが  
求められる。幸い当時は、BCま  
での輸送やサポーター隊を任せ得る  
大学山岳部OBと、縦走隊を務め  
得る社会人山岳会の先鋭的なクラ  
イマーがそろい、両者を融合させ  
た隊をつくることができた。高所

縦走という課題の困難さとサポー  
トの必要性が、役割を分化させ、  
個々人がそれぞれの能力を発揮す  
る場が生じたのである。  
こうした隊における隊長の役割  
は、シエルバなど日本人以外の隊  
員を含む全員に、各キャンプの状  
況や情報を共有させることであり、  
それ以外にあるとすれば、計画の  
断念や撤収の指示だけだという。  
加えて隊長に求められることは  
「目標に関しては絶対によれない」  
ことだと喝破する。

現在のヒマラヤ登山はますます  
多様化が進み、著者が経験したよ  
うな大掛かりな登山が行なわれる  
可能性は低い。だが、登山の形態  
が変わろうとも、自律した個人の  
現場での判断の重要性やシエルバ  
との関係のあり方など、ヒマラヤ  
登山を目指す人が本書から得られ  
ることは多い。著者は登山者とし  
て、また文化人類学者としてヒマ  
ラヤに関わってきたが、前者の総  
括が本書であり、後者のシエルバ  
社会研究の集大成が「シエルパ  
ヒマラヤ高地民族の20世紀」(茗溪  
堂、2001年)である。この双耳  
峰のような2つの著書を併せ読む  
(縦走する)ことで、広義のヒマラ

ヤ理解がより深化することは疑い  
ようがない。

本書を読んで思い出したことが  
ある。登山前のカンチエンジュン  
ガ隊が集うカトマンズのVan  
anレストランに著者を訪ね「鹿  
野先生」と声を掛けたとき、「おい、  
先生だつてよ」と言つて笑つてい  
た隊員たちの姿だ。人によつて呼  
び捨てだつたり、敬称が付いてい  
たりと、著者にとつての人間関係  
がそのまま現われる本書は、誠実  
な「一人の人的記録」となつて  
おり、組織論としても優れたもの  
である。

(南真木人)